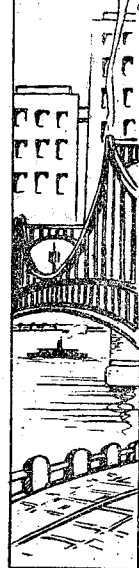


論
説



國民精神總動員下に於ける道路祭の意義

井 上 弘 道

(一)

今將に戰時體制下、われ／＼國民の生活はその全分野全機構に互りて即ち精神的には勿論物質的にもはたまた企業人も勞働人も打つて一丸眞に舉國一致以つて高く揚げられたる堅忍持久のスピリットを眞面目に眞劍に實踐しつゝある。日本國民の義務としてまたその誇として、われ／＼の日常生活には寸分の隙もなく文字通り全身全魂の張り切つた生活が要求せられてゐる。先般來國を擧げての國民精神總動員が實施されてをり、またには國民的運動として物資總動員が敢行せられわ

れ／＼の日常生活は頓にその緊張度を加へて來た。

かゝる緊張せる舉國的國民精神總動員下に於いて、われ／＼道路に生命を見出し之れに全力を捧げた所謂道路報國をモットーとするわが道路集團に於いても、當然かゝる時局を強く認識し此の國民精神乃至は物質總動員の大動員令の意義を充分に發顯して之れに應へることがなければならぬ。これ國民としての義務であり光榮である。

道路の完備が直接軍事的に經濟的に或はその他種々の文化現象に對して極めて重大なる効果を致すものであるからして、道路に關係をもつ道路集團人の責任の重且つ大なるは今更申すまでもないことである。然し、道路集團人の戰時體制下に於ける責務の重大性はかゝる外形的或は數字的な技術方面に於けるもののみではない。道路報國と云ふ意味は此の場合もつと廣義に解釋され實踐されなければならぬ。そこに日本國民としての獨自性とまた文化生活を營む國民としての誇を生かして行く必要がある。今日われ／＼はこの技術的良心の完全なる發揮を必要とするのみに止まらず、更に道路を通じて或は道路に依つて國家に貢獻する處があらねばならない。世界の道路人としてではなく、忠良なる日本臣民の一部としての道路集團人たる我を強く確認するときに感ずる義務と誇は實に此處にあるのである。

國民精神總動員が實施せられ且つその徹底の必要が高く叫ばれてゐる今日、そしてかゝる認識の下に立つとき、われ／＼は冷靜に自分の生活と自分の仕事に就いて反省して觀る必要があるのでは

あるまいか。國民精神總動員は國民一般論として道路集團人の意識内容を再検討することによつて、先づ技術人たる前に日本臣民たるの光榮ある下部構造を強識せしめることから出發するからである。西洋流の理論からすると純粹個人なるものの實在性が肯定せられそれがすべての出發點となつてゐる。此の具體的な現はれが自由平等博愛の思想であり、人權宣言であり、民約論である。かゝる西洋渡來の學問を受けた現代國民は、兎角勿論無意識的にはあるが各自が相互依存の生活を營むことによつて其處に國家社會を創造したかの如きまた構成してゐるかの如き妄想を抱くに至る。しかし實證科學の立證するところによれば、われ／＼個人なるものは決して國家を造つたのではなくして逆にわれ／＼は國家社會の中に於いてのみ生れ而して成長の生活を營み得てゐるのである。即ち、あるがまゝの姿に於いては決して純粹自我は存在してゐない。個人は集團人としてのみ存在以外のものではあり得ないと云ふことを深く銘記しなければならない。

次に仕事に就いて反省するとき、現代的解釋からするならば、われ／＼は自分の生命保持の生活の資を得るために働くが如く考へる。従つてこの場合仕事なるものは積極的ではなく消極的意義に於いてのみ觀念されてゐる。換言すれば、與へるためのものでなくして得るためのもつとされる。しかしかゝる考へ方こそ實に西洋流の個人主義的惡弊的通念であつて、日本の生活の實相と仕事の眞相に悖るも甚しいと云はなければならぬ。われ／＼の理解からするならば、或はまたわが日本歴史の證明するところによれば、實にわれ／＼の生活われ／＼の仕事こそは皇國への奉仕の生活で

あり奉仕の仕事であつたのである。之れを言ひ換へるならば與へる生活であり仕へる事であつたのである。茲に日本國民の生活意識があり、日本産業の精華があるのである。

即ち、生活をかく理解し仕事をかく認識するときわが日本道路集團人の存在意義と活動的責任は極めて重大化されるを覺える。日本精神に覺醒した道路集團なるものは、その全心全力を擧げて、皇國に奉仕すると云ふ姿を展開して來なければならぬ。所謂道路報國の眞義は此處にある。別な言葉で云ふならば、道路に關するあらゆる社會事象を總動員することによつて皇國發展の爲めに寄與するところがなければならぬのである。

かゝる意味と理解からして、道路集團は直接道路の整備に全力を傾注することを以つてわが能事終れりとはせず、進んで道路に據つて現下の國民精神總動員にも卒先一役演ずることを以つて、日本國民であり道路集團人であるの誇と義務としなければならぬ。即ち茲に顯して、國民精神總動員下に於ける道路祭の意義となし、以ていささか之れを解明せんとする所以である。

(11)

いま茲に提唱する道路祭と云ふ表現は、われ／＼日本人にとつては目新しいものでは勿論ない。しかしかく云へばとて、日本精神の覺醒喚起による一具體的現象として、しかしそれは本當のところを忌憚なく云へばかゝる風潮に乗じたもの或はそれを利用したものと云ふ感が深い、近時亂用さ

れてゐる百貨祭商品祭菓子祭などと云ふが如き一種の商賣戰術としての何々祭とは全然その意を同じくしてゐないと云ふことを斷つてをきたい。時流に投じた淺薄なる何々祭の如き或るものは、それ以前特賣デーとか奉仕デーとか云ふ西洋流の商略から一步も出るものではなくして、それは毫も日本精神を發顯するため或は發顯したものではなくむしろ日本的祭禮の面目を冒瀆するものと云ふべきである。

われ／＼の主張し強調するところの道路祭なるものはかゝる商賣戰術とその形式に於いてまたその精神に於いて大いに異つてゐる。従つて道路祭と云ふことが日本人にとつて決して目新らしいものではないと云ふことも、かゝる時流的意味によるものではなくして、日本人が歴史的に集積包含してゐる日本精神現象との關聯下に於いて理解さるべきである。言葉を換へて云ふならば、われ／＼は道路祭を古き日本歴史上の一事實として既に實踐してをり、また傳承的に實踐して來てゐると云ふ意味に於いてである。只それが不幸にして、時間の經過と共に一部分的に行はれたこと及び現代的意味をもたなかつたと云ふことによつて、今日全國民的實際的運動となり得ないでゐたと云ふだけである。かゝる歴史的意義をもつ道路祭なるものがわれ／＼の祖先によつて執行されてゐたとするならば、現下の時局に於いて之れを再興し一般化することは洵に時機に適した日本精神喚起發揚のよき與件ではあるまいか。

明治四年六月畏くも朝廷におかせられて大祓の儀が復興せられ之れが各神社に於いても一般的

に嚴修されることによつて、國民一般の日本精神覺醒に大いなる結果を惹起したことは動かすべからざるの事實である。また幕末本居宣長翁たちによる國學運動が日本上代思想の探究的闡明上代風習の復活によつて、即ち復古神道の唱道と實踐によつて、日本精神本然の姿にたちかへることをモットとした明治維新斷行の大業の準備工作の完成に與つて力ありしことも忘るべからざるの史的快事である。かくの如く日本精神の喚起を實現せしめる場合には、必ずそこに日本民族の潜在意識層たる宗教意識乃至は神道意識なるものが顯在化されるところがあらねばならなかつたのである。別な表現を用ひれば、國民精神の究極的効果實績を擧げるためには、全日本民族の潜在的宗教感情の琴線に觸れることなくしては本來的美音を發することは出来ないと言ふことである。かゝる史的事實の確認はこの道路祭の意義と方法に重要な示唆と志向性を與へる。

この意味に於いて、われ／＼の執行せんとする道路祭は西洋流の何々デーとか時流に投じた何々祭とか云ふ非宗教的即ち世俗的營利主義的感情の擡頭を排撃しなければならぬ。それと共に、日本民族のもつ潜在意識に於いて許容されてある歴史的事實を解明し、これの復活を一般化することが必要である。茲に、道路祭の歴史性とその精神を探究し解説することから始める所以である。

III

勿論日本文化史上に於ける道路祭なる名辭を發見することは此の際私のなさんとするところで

はなく、また必ずしもかゝる史的考證や字義探索をすることを必要としない。問題は道路祭の意義を表現し規定したものを發見することである。かゝる意味からわれ／＼は茲に、延喜式祝詞に收録されてある道饗祭を擧げることが出来る。かくして私はこの道饗祭の現代的再現としての道路祭を提起せんと意圖するものであるが故に、先づこの日本民族所産事象としての古き道饗祭の意義と精神を宣揚してをきたいと思ふ。

この祭禮は官選の延喜式に記録されてあることよりして國家的祭祀であると云ふことゝそしてまた全く宗教的意義をもつてゐると云ふことを先づ承認しなければならぬ。事實この祭はその昔毎年六月と十二月の年二回吉日を選んで、京師四隅の大道上で道路神八衢比古、八衢比賣久那斗の三神を奉齋して種々なる味物を横山の如く供へ奉りて神祇官が祭儀を執行するのである。この祭祀は延喜の御世に御選定になつた延喜式にその祝詞をみるのであるが、この祭がそれ以前から日本民族の國家生活中に於いて古く國家的祭禮として傳承的に執行されてゐたことは、この祝詞の末節にある「神官天津祝詞の太祝詞事を以ちて稱辭竟へ奉らくと申す」と云ふ言句からも想像し得られる。従つて、かゝる祭禮が日本古代の民族集團の生活意識の要素として爾來日本民族のもつ潜在意識層を構成してゐると云ふことが許されるだらう。

かくの如くこの祭禮は純然たる宗教的形式と内容をもち全く宗教感情の發露として實踐されてゐたと云ふことは、今日道路祭を執行する場合大いに取り入れ参考とすべき點である。と云ふのは

さきに述べた理由の外に、宗教はあらゆる社會的價値の源泉であつたからである。しかしこの場合、宗教感情と云ふ表現に對して反感を惹起するならば、日本に限つて神道意識或は日本土代思想乃至は古代日本精神と云ふ表現に置き換へてもよい。

さてこの祭禮に於いて、具體的に神に申して祈願するところは即ち直接的先決的にその意圖するところは、その祝詞にも申されてゐるが如く

根の國底の國より麤び疎び來む物に相率り相口會ふ事無くて下行かば下を守り上往かば上を守る、夜の守日の守に守り奉り齋ひ奉れ

と云ふところにある。これは上代人の素朴な宗教的心意を卒直に表現したものであるが、即ち上代人の思惟からすれば、京師に種々なる災害の起るのは、一般に暗い汚い穢れた嫌忌すべき存在と觀念されてゐたところの意識存在たる根の國底の國から疫病や災難や害惡が道路つたひに進入して來たものと信じられてゐたのである。この意味に於いて、かゝる惡神が道路を通過する場合味が味方なる道路神がこれに打勝つてその進入を防遏してくれるやうに道路神に祈願し供饗してそを活氣付け活動を振起させたのである。それ故かゝる道饗祭の意義はそのまま現代人の信仰にまでもち來たすことは不可能事かも知れない。しかし此の祈願の現象型態は現代の意味付けによつて生かすことが可能である。例へば、根の國底の國より麤び疎び來む物に相率り相口會ふ事無くこと云ふことの現代の意味付けを考へてみるならば、露骨に端的に云ふならば、赤露から道路により航路によ

り或は航空路により電波により日本國に進入して來る害惡に國民が特に道路集團人が欺瞞され、懷柔され妥協することなきよう神に祈願し且つ自ら自重警戒することになるのである。かくして道路神を祀ると云ふ事實は大いに之れをまなぶべきであるがしかし、その具體的祈願の内容と表現は更に發展的に或は現代的に意味付けする必要があるであらう。

さらに、この祭の最高理想となり統一的歸一的祈願なるものは現代に於いても極めてそのまゝ主要なるものであつて、それを現代的道路祭の最高指導原理式は根本精神としなければならぬものである。と云ふのは、上代人が前記の如き具體性に於いて祈願したことの究極的目標は即ち中樞的根幹的原理目標は實にわが日本精神の發顯にあつたからである。このことは同じ祝詞に於いて

皇御孫の命を堅磐に常磐に齋ひ奉り茂し御世に幸へ奉り給へと申す

と云ふ至高絶對的表現に於いてみる事が出来る。即ち道路神に惡神の京師へ進入せざることを祈願するのは實に皇御孫の命の御世の彌榮のためにである。更にまた、同じ祝詞に於いて親王王等臣等百官人等天の下の公民に至るまで平けく齋ひ給はんことを祈願してゐることは、この祭の全國民的性質を證明するものである。また道路の効用が全國民的であり従つて道路集團人の職能が得るためのものであるよりも興へるためのものであることを意味してゐる。換言すれば、全國民即ち國家全體への奉仕と云ふ觀念が明瞭に表現されてゐるのを見ることが出来る。實に道路集團人の責任の重大性並びにその國民としての誇を痛感してゐる姿がうかゞはれるのである。

茲に、道路祭なるものが單にありふれた祭禮騒ぎでもなくまたそれかと云つて道路の美化とか愛護とか整備とか云ふ末梢的方面或は手段的乃至は二次的方面にのみ拘泥し停滯することなく、大いなる國家的國民的的重大意義の認識下に執行されることが現下の道路集團の國家報恩の主眼なりと信じ且つ主張するものである。

(四)

さきに八衢比古八衢比賣久那斗の三神を以つて道路神なりと斷定して論を進めて來たが、こゝで一應道路祭の祭神となるべき道路神に就いて説明し立證してをく必要がある。今日道路神は道路そのものを指稱するよりもむしろ道路との機能的關係或は聯想的關係に於ける交通安全の守護神と云ふ意味で或は性病や戀愛の願事成就のための神と云ふ意味内容に於いて信仰されてゐる。従つてわれ／＼の云ふ國家守護をその最大至高の任務とすると云ふ道路神とは似ても似つかぬ全く類型を異にしたものである。これらのことに就いては學者が色々と説明してゐるが故に、今はその事例の一二を示すにとゞめかゝる現代的通俗的解釋と信仰から私の意味し提供する道路神を區別してをきたい。このことは、祝詞がその祭禮の意義を説明し闡明するものであると同一範疇に於いて祭禮の對象たるその祭神の機能的檢討乃至は史的探究は、その祭禮の理由と意義を最もよく認知せしめるからである。と云ふことは祭なるものゝ本質はその祭神の意味内容の發顯に外ならない。

からである。

道路神或は道神に就いての名稱は日本民族の俗信仰即ち民間信仰に於いて種々なる表現を以つて示されてをり、従つてそれぞれの専門的機能を營むものとして崇拜されてゐる。例へば道祖神と云ふ場合には石神崇拜と關聯して男女の性事象の祈願の對象となつてゐる。源平盛衰記に出てゐる有名な笠島道祖神の如きは、單なる交通守護神としてではなく、むしろ交通神としての意味は忘却せられ専ら性事象達成の専門神として信仰され當代賑ひを極めてゐた。この外倭名類聚抄が云ふ如く道神はまたタムケの神即ち手向の神と云ふ表現をもち、この場合にも道路それ自體の機能の神格化と云ふよりもむしろ人間の心情的性質を物語るものとなつてゐる。さらに土佐日記や袖中抄などに歌はれてある道神はチブリの神と呼ばれ、この場合には陸上の道路のみならず海上の道路即ち海路をも指稱した道神であつて廣く交通安全旅行安全の守護神としての意味を現はしてゐる。或はまた古事記に於いてはミチノナガチハの神とかチマタの神と呼ばれてをり、日本書紀に於いてはフナドの神とかナガチハの神と稱せられてゐる。

かくの如く道路神はその名に於いて種々なる表現法をもつてゐるが、われ／＼の問題とすべきは道路のもつ國家的或は社會的意味存在としての効用性を強く認識することが肝要である。即ち、信仰の原初的形態に於いて思惟せられた場合の集團的特に國家的存在としての効用性乃至は職能に於いてこの道路神を把握することが必要である。この故に、われ／＼は別の意義に信じられるおそ

れのあるところの從來の表現法を用ゐることを極力避けなければならぬのである。この意味に於いて、われ／＼の道路祭の祭神が所謂通俗信仰から比較的かけはなれてゐると云ふことがわれ／＼の意味存在たる道路神を理解する上から必要となつてくる。この場合、古事記や日本書紀に出て来るミチノナガチハの神とかナガチハの神とかを道路神の祭神にもつて來てもよいであらう。しかし、通俗信仰からかけはなれてゐると云ふことだけでは集團的祭禮の祭神としてとり上げることが祭禮の本質論からして決して上出来と云ふことは出来ない。そこにはその祭神の意味内容が正當且つ充分に一般人に知られてゐることが最も肝要である。即ち、その神の職能が史的に熟知せられてゐることを必要とする。それ故、記紀の前記二神は單にその生成の由來を知り得るのみであつてその肝心な職能の點が明かではない。祈願すると云ふのはその神の活動能力に對應したことを祈願するのであるから、祭神の職能を知ることが大いに重要な事項である。然るに延喜式祝詞に稱辭竟奉る八衢比古八衢比賣の二神は鈴木重胤翁の解説によれば、黃泉國に於けるイザナギノミコトを助け奉つた神話に有名なミチカヘシの大神の偶神化であるとされてゐるが、これが正鵠を得たものとすれば充分條件に適つた神名である。假りにかゝる所説の危険性を考慮に入れたにしても、延喜式祝詞に於ける三神は祝詞自身が最も正しく説明してゐるが如く、その信仰の純正性に於いてまたその國家性に於いてさらにその活動能力の意味内容に於いて、われ／＼が理想とする性質に最もよく適合してゐるものと云ふことが出来る。それ故、私は茲に道路祭の祭神として八

衢比古八衢比賣久那斗の三神を統合して道路神と云ふ現代的名稱を提案するわけである。

かく道路神を理解することによつてわれ／＼は日本精神の本質的なものに觸れることが出来ると共に、そこに道路祭の意義と道路集團人の誇をもつことが許されるのである。萬葉人が嘗て詠んだ歌にもられてある日本の意義即ち山川もよりて仕へる神の御代かもと云ふ此の上もなき卒直な日本精神の發露或は日本の現象の如く、道路そのものも山川と共に皇御孫の命の御世の彌榮のために奉仕する姿が現はれて來るのである。私は、道路神の意味存在性をかく認識することが至當であると思ふ。

かくして以上道路祭の精神とその祭神並びにその性質の決定をみたわけであるが、しからばこの道路祭を如何なる方法によつて執行すべきであるか。問題は方法論に移る。そしてまた、その祭禮の直接的に喚起すべきところの性情並びにその惹起すべきところの効果を検討し、道路祭の意義をより日常化し多角化することによつて最高理想の具體的實踐を意義付けなければならぬ。

(五)

既述の如くこゝに云ふところの道路祭は商賣戰術としてのお祭騒ぎではなくして、純正なる日本精神の下部構造を構成する宗教的意識の活動を喚起するものでなければならぬ。従つてその祭が宗教的形式を以つて執行さるべきことは道饗祭の場合と同然である。多くの宗教的儀禮が先

づ必ず修祓を行ふが如くに、この祭の場合に於いても、事前に清淨化の準備工作がなされることが必要である。一般的には身心を淨め神饌物を淨めまた祭殿を忌まはり清まはるわけであるが、勿論この祭に於いても之れと同様な行事が行はれて然るべきである。然しこの祭が道路祭であると云ふ意味に於いて、道路の修理や清掃それから街路樹の手入れなどが行はれなければならない。しかも、道路の恩恵に浴しない人間は一人もゐないと云ふ意味に於いてこの祭に参加すべきものは全國民であり、従つて全國一齊に道路全體の清掃修理が奉任的に宗教的に實修さるべきである。即ち、營利的打算的或は法律的藝術的命令や意圖に於いては、はなく日本國民の均しく内包する神意識乃至宗教感情の發露に於いてなされなければならない。國民感情にはたつきかけたかゝる宗教的行事の實踐によつて、必然的に道路は規律を得整備され美化されて來るのである。

次に獻饌行事であるが道饗祭のときにも御神酒御神饌種々の味物が奉獻されることが必要條件であつたが如く、此の現代的意義をもつ道路祭に於いても祭神に赤心より溢れ出た清淨な獻饌がなされなければならない。しかし此の場合に於いては道路が祭神だと云ふ意味に於いて道路に聖供がなされる必要がある。勿論道饗祭と同様な聖供がなされて然るべきであるが此の場合にはそれらの外に新しき物が供へられなければならない。即ち國民の勞働奉仕によつて得られた、必要とされるべき道路に街路樹の移植的獻進や街路燈の獻燈、その他アスファルトやセメント及び小石それから撒水がこの文化的現代的意義をもつ道路祭のこよなき聖供である。かくして道路は宗教感情の

流露として愈々美化され整備化されるの結果を來たすのである。

次にこの祭の謂は、スローガンなる祝詞が奏上される。この祝詞は前に擧げた道饗祭の古典的祝詞をそのまま奏上しても差支へないが、これを更に現代的理解の可能なるが如き表現法にすることも効果的と考へられる。然しその根本精神は變更されては意味をなさないことは申すまでもないことである。即ち祝詞なるものはその祭禮の意義を聲明するものであることを忘れてはならない。この祝詞中に於いて特に注意を要するは祈願句と感謝句である。何故ならばこの點が祝詞の中でも特にその幹根をなすと共に、また祭禮の本質的意義をなすものだからである。

現代人ほど感謝報恩の念の薄いものはないと云はれてゐるが、このことは決して喜ぶべき現象ではない。かゝる崇高なる人間の感情の衰退は社會生活或は國家生活の弛緩破滅を招來せしめるものである。しかるにこの道路祭に於いてはそれが國民的宗教的祭儀であると云ふことによつて、この感情が必然的に存在しましたそれが強く喚起せしめられるのである。元來日本人の營む祭なるものはすべてこの感恩報謝の念が凝つて祭となつたものであるからして、この道路祭の場合に於いてもかゝる報恩感謝の至誠が不可欠的條件として要求せられるのである。實に道路が社會生活國家生活に果せる効益の大なるは今更言擧げするまでもないことであるにも不拘道路に對して感謝の念を抱くもの果して幾人あるであらうか。道路がかくわれくの生活に於いて重要な役割をもつものであることを承認するならば、當然その道路を建設した祖先に對しまたそれを修築した道路

集團人に對しても同様感謝の意を表すべきではあるまいか。かゝる宗教感情の發動によつて必然的にそこに道路の愛護の念の結果が現象的に現はれると共に、道路に生命を盡せる道路集團の貢獻者に對して國家的表彰の美儀が行はれなければならなくなる。かくしてわれわれは具體的現象的に眞に祖先と密接な關聯を意識し國家に強く結び付けられるのである。そして道路の愛護がとりも直さず國家の愛護即ち愛國祖先崇拜の美德たる所以が自覺せられ、皇國への赤誠的奉仕の念が愈々溢盛となるのである。こゝに道路尊重の念は宗教的意義と國家的意義をもつて一段と保障せられ一層と意義付けられる。

同様に祈願の意欲は祭神の史的行爲或は信仰的機能の再認識に外ならない。さきに祭神の意味存在性を決定した理由は實に茲にある。しかし、一般的に注意すべきことは、その祈願の内容が如何なるものであれ祈願的叙述が只單なる空想や憧憬であつてはならないことである。上代日本人が祭禮に於いて神に祈願する事例は、即ちとりもなほさず彼等の日常生活の理想であり、従つて實踐的行爲の投影であつたと云ふことを忘れてはならない。換言すれば、御世の榮を祈願すると云ふことは我等の最高理想であり、従つて日常生活に於いてそれが具體的に種々なる方法によつて實踐されてゐることであり、またそのよりよき實踐實現への努力であつたのである。祈願はそれ故かゝる純正なる宗教的實踐的意味に於いて理解されなければならぬのである。即ち祈願とは神に誓つた日常生活の謂である。この意味に於いて、道路祭に於いて道路の完備堅固を祈願するなり或は交通

の安全を祈願するならば、それは完備堅固たるべく努力することの決意の表明であり、また交通事故に對して一段と注意を拂ふべきことを意志表示し自覺し實行することであらねばならないわけである。茲に活力と義務感が湧いてくる。

さらに續いて祭禮の行事が行はれなければならない。道路集團人は勿論全國一齊に國民舉りて大行進を起すべきである。しかもそれは全國同一時刻に行はるべきである。この行進には樂隊や旗も御隨意であるが不可缺的に必要なものとして各自手に手にシャベル、鍬、箒、バケツ、水など一見奇異な品々を持參に及び、しかも眞剣な奉仕的能動的な大行進であらねばならない。この大行進は葬儀の行列とは異なり意氣ある活動性を以つて、持參携帶の道具によつて更に道路の整備美化を徹底化すべき行動を行ひつゝ進む。かゝる行進は只單なる道路愛護宣傳の行進とは異なり、國家的意義を發揮しながらそれと共に道路に就いての實際的効果を擧げ得るものである。この大行進の進むところ、そこには外形的に整備された道路が存在するのみならず、もつと緊要重大な精神的効果を喚起してやまない。即ち、生きた道路道德、道路美化の強き教訓を例示しながら、更に現下の國民精神總動員に答へるものではあるまいか。奉仕の念を涵養し、滅私奉公の實習を行ふよき道場ではあるまいか。これ實に、道路集團人が道路に生き、道路によつて國家に奉仕する生き生きとした理想型態であり、また現象型態であらねばならないのである。

(六)

嘗て私は本誌上に於いて、道路はミチなり道徳なる所以を解明してをいたが、道路集團人たるもの此の意に徹底し道路に生きること即ち道徳に生きることであり、道路の整備は即ち道徳の整備なる所以を強く諒得すべきである。かゝる主張よりして、時將に非常時國民精神總動員の實施せられ全國民齊しく緊張の秋、道路費の節減をかこつことなく、天下の大道。即ち日本國家の大理想に勇往邁進することを以つて道路集團人の重大主要任務とし且それを最大の誇としなければならぬ。かくして、わが道路集團人は日本國家人たるの強き自覺下に道路祭の意義を不斷に實踐し發顯することこそ現下最大の緊要事と考へるものである。